

2012年7月28日の毎日新聞夕刊は、第30回オリンピック・ロンドン大会の開会式を報じていた。そして、204の全出場国・地域に女性選手が参加した画期的な大会であることを報じていた。

次の文は、甲南女子中学・高等学校『研究紀要』第31号(2010)に投稿・掲載したものである。今回、訂正などは、誤字など最小限にとどめた。

## 人見絹枝 — 胡適が「真の東方之新婦人」と感嘆した女性

— イエテボリ・アムステルダム・プラハそして大阪市立運動場 —

蘆田 東一



### 目次

- 一 はじめに
  - 1 人見絹枝のこと
  - 2 人見絹枝の著作のこと
- 二 イエテボリ（1926年第2回女子オリンピック・イエテボリ大会）まで
  - 真の東方之新婦人であった人見絹枝 —
- 三 人見絹枝とオリンピック
  - (1) 1926年第2回女子オリンピック・イエテボリ大会
  - (2) 1928年第9回オリンピック・アムステルダム大会
  - (3) 1930年第3回女子オリンピック・プラハ大会
- 四 人見絹枝という存在

(人見絹枝著『ゴールに入る』から)

### 一 はじめに

#### 1 人見絹枝のこと

人見絹枝という人は、日本最初の世界的な女性アスリートであったことは有名である。最初に、オリンピックの表彰台に上がった日本人女性として知られている。私が、この人見絹枝についての文を書いたのは、2004年であった。2004年はオリンピック・イヤーで、その年、アテネで開催された大会に参加した日本の選手団は女子選手の数が男子選手を上回ったそうである。毎日新聞にも、女性のオリンピック参加の歴史に関する特集記事(7/25、8/2、2004)があった。また、NHKの松平定知の「その時…」で人見絹枝の特集を組んだ。<sup>\*1</sup>

オリンピックで活躍して日本人女性といえ、その人見の活躍したアムステルダム大会の8年後、1936年ベルリン大会の平泳ぎで優勝した競泳の前畑秀子の名と並んで、ある

いはそれ以上に陸上競技の人見絹枝の名があがる。オリンピックの女子マラソンで二度にわたり表彰台にあがった（バルセロナ銀・アトランタ銅）有森裕子が、人見絹枝のことを岡山の先輩ということもあり、尊敬しているという新聞記事をみたことがある。

また、シドニー・オリンピックのマラソンで転倒しながらも七位入賞した天満屋の山口衛里も人見絹枝の墓参をしてシドニーに臨んでいる。

その人見絹枝について、平凡社『百科事典』（1995年版）の広畑成志氏による記述は次のとおりである。

**人見絹枝** 女子陸上競技選手。岡山県出身。岡山高等女学校を経て、1925年二階堂体操女塾（現、日本女子体育大学）卒業。京都第一高等女学校教諭となったが、26年大阪毎日新聞社に入社、陸上競技に専念する。この年の第2回世界女子陸上競技大会（スウェーデンのイエーテボリ）に単身参加し、走幅跳び、立幅跳びで1位など、個人総合優勝した。その後、走幅跳び5.98m（1928）、200m24秒7、三種競技217点（1929）の世界記録を樹立。女子陸上競技が初めての種目となった28年の第9回アムステルダム・オリンピック大会に出場、800mに2分17秒6で2位、日本の女子選手で初のメダリストとなった。31年肋膜炎で倒れ、24歳の若さで死去。不世出のスプリンターといわれ、日本の女子陸上競技の向上に貢献した<sup>2</sup>。

限られた字数で、一人の人物を紹介するのは困難を伴うが、明らかに訂正を必要とするのは、「26年大阪毎日新聞社に入社、陸上競技に専念する」という箇所である。陸上競技選手として入社したようで誤解を招く。大阪毎日新聞社には、記者として入社したのである。自身の陸上競技については新聞社の仕事を終えたあと、大阪市のグラウンドで、一市民としてトレーニングしている<sup>3</sup>。

また、アムステルダム大会のあと、1930年、プラハで第3回世界女子オリンピック大会が開催された。この大会に、人見絹枝は、団長、コーチ、選手として臨んだ。アジアからの女子選手団の参加をみることによって、この大会は、ヨーロッパとアメリカだけの大会でなく、女性スポーツの交流と普及を画する本格的なワールドワイドの国際大会になったのである。その最大の功労者が人見絹枝だったのである。何度も世界記録を塗り替えてきた人見絹枝は注目の的であり、それが自分を含め6名とはいえ、選手団を率いてきたとあって、世界のスポーツ界の注目を浴びることになる。この大会の人見の事績を略しては、その生涯のいくらかも描いたことにならない。本稿では副題を「チェコ・プラハに見る人見絹枝の記念碑」とすることによって、人見の業績を称揚することも考えたが、これもまた一面的になると考えた。

尚、「不世出のスプリンター」という表現は、死後50年に編著として出版された自伝のタイトルも『炎のスプリンター』となっていることにもよるのだろうか。確かに100m200mでの世界記録を破ったことがあるが、跳躍種目には自信をもっており、投擲競技でも世界のトップアスリートと競っている。ジャムパーでもスローワーでもあったようである。

## 2 人見絹枝の著作のこと

人見絹枝は、スポーツに関する単著だけでも、『最新女子陸上競技法』文展堂書店、大

正 15 (1926) 年、『スパイクの跡』平凡社、昭和 4 (1929) 年、『ゴールに入る』一成社、昭和 6 (1931) 年 2 月、『女子スポーツを語る』人文書房、昭和 6 (1931) 年 10 月、を著している。

『女子スポーツを語る』は、1930 年の『家庭科学大系—女子と運動競技—』(家庭科学大系刊行会) という共著の一編を単行本にしたものである。というのは、人見絹枝は、その 8 月に亡くなっているからである。さらに、1929 年に、三省堂から『戦ふまで』が出版されているが、内容が『スパイクの跡』と共通するところが多いとされる。

これらの著書は、1994 年に、大空社から『スパイクの跡・ゴールに入る』と合本して復刻復刊されているもの、2000 年にゆまに書房から『女子スポーツを語る』が復刊されている。さきに触れた織田幹雄・戸田純編著『炎のスプリンター—人見絹枝自伝—』(山陽新聞社出版局、1983) は、『スパイクの跡』『ゴールに入る』の主要部分の現代語訳再構成である。

スポーツ選手は、その記録やパフォーマンスで自分を表現するものだと思う。確かに人見絹枝のスタートダッシュや、ブロードジャンプの姿は素晴らしかったようで、今も残る写真からもそれは窺える。後続する多くの選手の手本になったようである。にも関わらず、短い生涯の、そのまた短い期間における旺盛な著作活動の意味も考えたいというのも、本稿を起こすきっかけになった。

- \* 1 8 月 18 日に放映された番組は、国民的期待のプレッシャーと戦い成果を挙げた女性ということに終始していた。女性とスポーツということについての国際的な視点をもったジャーナリスト、指導者であるというような観点はなかった。そのために、松平定知のアナウンスは、スポーツ選手を育成しようとしていた大阪毎日新聞が人見を選手として採用したという表現になっていた。購買部数を獲得できる運動部記者として採用したのである。
- \* 2 電子版による。1985 年初版 1995 年印刷版では、亡くなった歳が 23 歳になっているのが訂正されている。また、「京都第一高等女学校」とある。織田幹雄／戸田純編集『人見絹枝 炎のスプリンター』(『人間の記録 32』日本図書センター 1997) 年譜にも「京都第一高女」とある。この表記では、京都府立第一高等女学校、つまり現府立京都府立鴨沂高校のことになる。人見の著書『スパイクの跡』には、「京都市立第一高女奉職」と、京都市立堀川高等学校の前身名が書かれている。
- \* 3 「自分はアマチュアである。自分のやつてゐる跳んだり走つたりはあれは私の趣味楽しみなのである。私は自分のスポーツと社の仕事を半分半分にし、スポーツを社の一部に入れることは此の上なくいやな事です。人からそう思はれることは、アマチュアの選手として此の上もない恥です。私がむつかしい社の仕事に携はる時いつもこんな気持でやつてゐます。」(『スパイクの跡』「三、練習時代(11)」大阪毎日新聞時代における私」p、214)

## 二 イエテボリ (1926 年第 2 回女子オリンピック・イエテボリ大会) まで

人見絹枝は、文章力を認められて、大阪毎日新聞の運動部記者となっている<sup>1</sup>。24 歳の若さで亡くなるまでに、少なくとも 4 冊の著書を公刊している。さらに、生前に公刊され

てはいたが、没後分離刊行された著書（『女子スポーツを語る』）においてもまた彼女の  
人となりやスポーツに対する思いを知ることができる。

### （1）

人見絹枝の最初の著書は、大阪毎日新聞に入社した 1926（大正 15）年の 5 月に公刊し  
た『最新女子陸上競技法』である。彼女は 1907 年 1 月生まれだから当時 19 歳である。既  
に寺田瑛による『陸上競技の研究』も出版されており、大正 12 年に寺田瑛『女子の運動  
競技』が出版されたときには、寺田の『陸上競技の研究』は第九版であった。

人見絹枝のこの著書は、「最新」と「女子」という表題からその意欲が窺われる。また、  
二階堂体育塾で 1 年間の修学後、京都市立第一高等女学校に勤務し指導し、さらに勤務後  
自らのトレーニングを行っているが、その時に新たに獲得したものを表現しておきたいと  
いうこともあったのであろうか。人見は「経験から八分、研究から得たもの二分」で本書  
が出来上がっているとも述べている。序文に「いよいよ出来上がって見ると内容の平凡な  
のに驚き今一度書き直そうと思つた」というのは、いかにも客気あふれた気分を窺わせる。  
また「挿入の写真は女子のもので満ちそうとしたが、女子の之と云ふ完全なホームのない  
爲不調和とは思つたが世界一流の男選手の姿で埋め合す事にした」と嘆く人見絹枝がいる。  
女子スポーツは世界的にも依然黎明期であったのである。とくに日本は 19 歳の人見絹枝  
に競技ルールからトレーニング法、栄養・食事に至るまで網羅する著書を書かせているの  
である。

また、人見絹枝という、競技者であり、指導者であり、ジャーナリストとしての表現も  
しうる女性の存在は、大正デモクラシーのひとつの結実と言えないこともない。人見絹枝  
が『最新女子陸上競技法』を上梓しえたのは、長くはないが二階堂女塾の教育の結果でも  
あり、寺田瑛などの活動の結果である。四ヶ月に過ぎなかった京都市立第一高女での指導  
は京都の地にとっても女性スポーツ発展の契機になったようである。京都市立第一高女を  
四ヶ月で退いたのは、人見はあきらかにしないが、二階堂トクヨの念願であった二階堂塾  
の専門学校昇格は「東京女子体育専門学校」として実現するが、人見がそのための秘書と  
して尽力したことは述べている。人見絹枝が組織的経営的才能にも秀でていたことは、後  
の彼女の活動でもあきらかであるが、二階堂にも頼りにされたのであろう。

### （2）

1929（昭和 4）年に『スパイクの跡』は、出版された。人見絹枝自身の生い立ちからア  
ムステルダムオリンピック大会までの記録である。1927 年の『婦人の友』掲載の文が  
下敷きになったという本書は、世界的アスリートが自ら書いた本なのだが、時には競技の  
パイオニア、時には、大阪毎日のジャーナリストあるいは社会教育の体育教育者としての  
視点も入れ且つ味わいある文になっている。従って私たちは、アムステルダム大会（1928  
年）当時の社会スポーツの風景を、スウェーデン、イギリス、オランダ、それに大阪市民  
公園とみる事が出来る。面白いことに人見絹枝は日本女子スポーツのホープとして、例  
えばイギリスロンドン合宿からアムステルダムへ遠征しているのであるが、毎日、特派員  
の仕事を非常に優れて行っているのである。ロンドンでは宿舎がハイパークの前にあり  
ながらほとんど行かなかったと言っている。特派員としての仕事に忙しかったそうである。  
従って、本書は、昭和初期の日本と世界、そして女性とスポーツをめぐる歴史的な書物に  
なっている。

競技者と指導者を兼ねた人物であるから、記録は克明である。ただ、よく自身で辛い練習とか書いてはいるが、それほどハードな印象はうけない。それは、大阪医大の教授で毎日新聞の仕事もしている木下東作というアドバイザーもある。人見は、イェテボリ大会の翌年からマン・ツー・マンのコーチとしての谷三三五氏の指導をうけるようになる。しかし、基本的には自身がチーフコーチで合理的なトレーニング計画と練習を実行できるということ、そして、その成果を客観的に理論化しているからである。精神主義的不合理さは微塵もない。

1928年、アムステルダム大会の年の春の練習風景の叙述がある。

三月二十日 晴 肉食多し 睡眠回復す……名古屋でやった走幅跳の時少し痛めたと思われる右脚の前股筋がまた少し痛む。ジャンプ界に将来を非常に望まれている関大の大島さんが丁度居合わせたので、その大島さんとスタートの練習をした。百メートルを十三秒ぐらいのスピードで一回走ったが、言い合わせたように二つの時計が十三秒を指していたのには驚いた。……市立運動場にも、この頃の陽気につられて、またそろそろアスリートの姿がふえてきました。…

三月二十八日 晴 暖かし

八百メートルジョグ体操。スタートは今日は十分気をつけてやることにする。……スタート矢柴さん（関大）共に五十メートル二回全力で、五十メートル一回軽く。……

（『スパイクの跡』 p.257）



矢柴春雄(左)と津田晴一郎(右)

(関西大学年史編纂室所蔵)

如何にも、スポーツを楽しむ大阪の社会人や学生の交流が描かれている。「大島さん」というのは、後、三段跳びでロサンゼルス大会で銅メダルを得た大島謙吉である。

上の写真は、関西大学年史編纂室に所蔵するもので、この左の人物が、人見の文に出てくる「矢柴さん（関大）」のようである。年史編纂室の説明は「矢柴春雄、津田晴一郎両選手は、ともに本学予科在学中に昭和2年上海で開催された第8回極東オリンピックに出場しました。矢柴選手は800メートルで2位に入賞、津田選手は、1500メートルで優勝しました。この写真は、大正15年8月に完成した、当時東洋一と称された本学のグラウンドで撮影されたものです（現在、その跡地に総合図書館や、尚文館が建てられています）」とある。スタンドの上に見えるのは、昭和3(1928)年建設の現簡文館の最初のものだろう。

人見は「市立運動場」と書いている。港区にあった市立運動場もよく使用したようだが、3月28日の場合は、登場のメンバーから、関西大学の千里山グラウンドの可能性もある。というのは、当時、大阪朝日新聞に勤務していた織田幹雄が、美津濃運動具店に勤務（後大阪毎日に勤務）していた南部忠平を誘って千里山の関西大学運動場でトレーニングしていたことを『早稲田学報』（平成9年9月号）で述べているからである（千里第二小学校同

窓会誌『千里山』創刊号に転載)。世界中から敬意をもって接せられることになるアスリートたちと学生、社会人の交流の場が北摂の千里山に現出していたのである。

(港区の市民運動場も学生や社会人がよく利用していたことは、やはり、関西大学年史編集室のホームページ掲載の関西大学法政大学交流戦の写真でも想像できる。)

### (3)

時間的に前後するが、印象的な場面がある。1926年、スウェーデンのイェテボリで第2回世界(万国)女子オリンピックが開催され、人見絹枝は初めての海外遠征として、この大会に単身参加した。ハルピンからモスクワまでのシベリア鉄道は大阪赤十字社院長の前田博士と早大建築科の今井助教授が同行した。途中停車があると人見はウォーキング、ジョギング(長めの停車のとき)を行っている<sup>2</sup>。シベリアの風景の叙述もすばらしいが、7月25日の記述につきのような文がある。

支那の新進思想家の胡適氏とも、ブロークンな英語で話しするようになった。大変おとなしい紳士である。

人見絹枝に「大変おとなしい紳士」と言われた胡適氏とは、辛亥革命後の中国の新文化運動の中心人物である。1891年生まれだから、やはり中国思想界の中心人物であった魯迅より、十歳ほど若く、当時36歳くらいになる。胡適は、アメリカのコロンビア大学で学位を得て、アメリカの異性を含む友人たちとの交流のなかでも、中国社会の慣例に従って、顔も知らない親の決めた婚約者との婚姻を果たしていた。そのように、改めて中国の現状に思いをいたしている胡適と、初めての海外遠征で張り切っている19歳の人見絹枝はどのような言葉を交わしたのであろうか。「大変おとなしい紳士」だとされた胡適には人見絹枝はどのように映ったのだろうか。

胡適は1910年、20歳のときアメリカに渡っていた。コーネル大学に入学、はじめ農学部に学び、1912年文学部に転部、1915年にコロンビア大学博士課程に進み、プラグマティズム哲学者デューイに師事した。胡適の存在が知られることで決定的だったのが、陳独秀らが創刊し、『新青年』と名を変えていた雑誌に1917年「文学改良芻議」を發表し、白話(口語)運動を推進することになったことである。

吉川幸次郎は1946年、胡適著・近藤春雄訳『中国文化革命』の序に予定されていた文に「現代中国の人人の生活のうち、民国以前の生活と、最も様相を異にするのは、何何か、と問われるとするならば、言語生活の改変は、その一つであると、答えよう」と書いている。少し長くなるが、胡適が主唱し、推進した「文学革命」というのは社会史的意味を持つものであるとして、次のように述べている。

というのは、前に述べたような優雅な文語の文章を書くには、甚だしい習練を要する。個人の努力のみによって作文の能力を獲得することは、おおむねの場合困難であり、より多く家庭の環境に左右される。そうした事態は、文章を綴り得る人間、いいかえれば完全な言語生活をいとなみ得る人間、更にいっかえれば社会人として完全な活動をなし得る人間を特定の階級に偏在させる。かくして成立した一種の知識貴族が、いわゆる「読書人」であり、「士大夫」であって、そうした「読書人」の階級、「士大

夫」の階級のみが、政治と文化に参与し発言権をもつというのが、過去何千年かにわたる中国の体制であった。／民国「文学革命」の主張は、こうした古い体制と、そうした体制をささえて来た理念との更改を、社会に向って要請するものであった。

(『吉川幸次郎遺稿集 2』筑摩書房、1996、p.566)

魯迅がはじめての作品「狂人日記」を、その『新青年』の4巻5号に発表したのは、「文学改良芻議」が発表された翌1918年であった。以後、魯迅は矢つぎばやに創作作品、文明批評を執筆、発表していくことになる。1923年に創作集『呐喊』が上梓された。

『新青年』は1918年6月に「中国の文学界・雑誌界未曾有の一大壮挙」と銘打って「イブセン特集号」を刊行した。その企画・編集が胡適で、彼は巻頭論文「易卜生主義」を書き、「人形の家」の翻訳を担当している。胡適は1919年3月、『新青年』に戯曲「終身大事」(清水賢一郎訳「結婚騒ぎ」)を発表した。

跡見学園女子大の山口栄先生に『胡適全集』第30巻(安徽教育出版社、2003、9)の胡適の日記に、次のような記述があることの御教示を頂いた。

July 22 (Th.)

……日本客中有人見絹江女士(Hitomi),爲日本女体育家,長於跳高、賽跑;此次代表日本赴 Stockholm〔斯德哥爾摩〕的 Olympic〔奧林匹克〕大会。此君長身短裙,矯健活潑、眞東方之新婦人也。

日本人客の中に人見絹江(枝の誤り)というスポーツパーソンがいて、ジャンプや競走に優れている。此の度日本代表としてストックホルム(エーテボリの誤り)のオリンピック大会(女子のみ)に参加する。彼女は長身で短いスカート(キュロットスカート?)を穿き、矯健活潑で、眞に東方の新婦人である、というものである。長身で短裙を着用し、停車する毎にウォーキング、ジョギングする極東の島の女性に目を瞠ったであろう。そのような東洋女性と英語で会話をするなどという経験はおそらく胡適にとって初めてのことであろう。さすがの新文化運動の旗手も、現実の新しい女性の、その存在に圧倒され、言葉も少なかったのであろう。

- \* 1 選抜高校野球開会式の選手が高名プラカードに先導されたり、勝利校の校歌が斉唱されるようになったのは、主催者大毎の運動部に勤務していた人見絹枝の提案だというエピソードがある。
- \* 2 私たちは「ジョギング」という言葉に馴染んだのは、一九八〇年代の世界的なジョギングブームによってである。人見絹枝の『最新女子陸上競技法』にウォーキング、ジョギングの方法の詳述があり、その後の著書にも、ヨーロッパ各地の都市の公園で市民がウォーキングを行っている光景のルポがある。
- \* 3 胡適自身の伝統中国との葛藤については、藤井省三「〈異邦〉のなかの文学者たち-3-アメリカの胡適—ダダイスト画家との恋」(月刊しにか 9(6)、1998-06)、藤井省三「彼女はニューヨーク・ダダ(1)(2)(3)胡適の恋人 E・クリフォード・ウィリアムズの生涯」(東方 180, 181, 182、1996-3, 4, 5)も参照。

昭和6（1931）年に出版されたのが『ゴールに入る』である。

私たちは、1928年のアムステルダムでの第9回オリンピック大会後の人見絹枝のことについて多くを知らない。アムステルダムの大会でデッド・ヒートを行い、24歳の若さでこの世を去った人の印象が強い。しかし人見絹枝は、その後にもまた大きな仕事を果たし、その時の過労が彼女の早逝に直接関係したようである。

『ゴールに入る』は、アムステルダム大会のあと、第3回世界女子オリンピック・プラハ大会には日本から女子の団体を率いて参加し、その後、ヨーロッパを転戦し、チームのメンバーを神戸の埠頭に上陸させるまでの記録である。

第2回のイエテボリの大会は、大毎の派遣であった。しかし団体となると桁違いの費用が必要である。しかも、今回は既に世界記録をもつ選手としての人見絹枝であった。参加させるのであれば本大会の予選は通過できるだけの実力、技術はつけさせないといけない。そのための合宿を企てなければならない。また費用がいる。アムステルダム大会まで競技者としての苦労があった。その後も競技者としての苦労はもちろんであるが、それどころではない苦労があった。

この著書は、アムステルダム大会後、心身の不調に陥っていた著者の人見が国際女子スポーツ連盟会長のミリア夫人の手紙で回復したことから始まっている。人見はミリア夫人としばしば手紙をやりとりはしていた。1929年の始めに人見はミリア夫人に元気のない心身の状態について訴えている。その手紙がいつもは英語だったのが、フランス語だったようである。その時の返事の激励が人見絹枝をして、日本の女子選手団を第3回万国女子オリンピック・プラハ大会に送り込むという快挙を成し遂げることになる。

アムステルダム大会後はヨーロッパを転戦し、好記録も出している。帰国後の不調の原因は体の疲れもあるが、国内の様々な状況によるのではないか。競技を通じ、国境を越えた人々の交わりやつながりは新しい世界であり、人見絹枝はそのような世界の市民であった。同時にまた、自分が突出せざるを得ない因襲充ちた日本社会にも籍を置くものであった。いわば国内での摩擦が人見を憂鬱にしたのだろうか。人見絹枝について書かれたいくつかの文献には、非常に下劣な偏見の痕跡があったことを伝えている。編集復刊された本の解説にも、当時、人見絹枝は男性ではないかとする不快な流言があり、また、同居する女性との同性愛を噂する人もあった。本人やその女性からは一笑に付されたとするが、それも積もり重なると、繊細な神経はダメージをうけかねないだろう。だとすると、ミリア夫人の一通の手紙は、あのラトケやラジドウの世界の通路であり、人見を救い、人見を改めて新しい事業に向かわせていったのだろう。

### 三 人見絹枝とオリンピック

#### （1）1926年第2回世界女子オリンピック・イエテボリ大会

単身参加したこの大会で人見は百メートル3位（2点）、円盤抛2位（3点）、走幅跳1位（5点）、立幅跳1位（5点）の合計15点は国別では5位、個人では総合優勝であった。この遠征は人見にとって、国内でのトレーニングの成果を発揮するとともに、実際にヨーロッパの選手と競い学ばいけば留学と同じ意義も持ち得た。

一日目の百メートル決勝について人見は次のように書いている。「決勝点迄斯のまゝ走



つて居たならハインズに三着を得られるに決まっておりますと思つた時、ゴール前二米遍で私は思ひ切つてジヤンプフキニツシュを行つた。」人見は次のようにも書いている。「ゴール前の接戦、私はこの大会に出場して初めて体験することが出来た。ラヂドウ、トムソンの接戦はあとから走っている私にも物すごく思はれた。ラヂドウのフキニツシュはランヂ、フキニツシュであつた。トムソンはランニング・フキニツシュを用ゐてゐた。」

先の『最新女子陸上競技法』において「巴里オリンピックでパドック選手とシヨルツ選手の二百米の決勝に於て大接戦があつたその時パドック選手はシヨルツ選手より勝つていた所をあのジヤンプによるフィニッシュをした、めに（多分そうだらう）二等のシヨルツの爲に勝をとられたと云ふ事がある。この時シヨルツのゴールインは片肩でテープを切る方法であつたときく。／もし之を行ふときはジヤンプの利くランナーに限る。」と叙述している。しかし、自身が実際のゴールで接戦を体験したのはこの大会で初めて、自分がレースをしながら実権と観察と習得を一瞬で行つたことになる。

まさに、このエテボリ大会は人見絹枝にとつても日本女子陸上競技にとつても貴重な大会であつた。円盤抛に関しては、人見絹枝が（日本にはまだ実物は無かつた）円盤を手にしたのは、当地に赴いて初めてのことである。購入して練習を始めている。それから1ヶ月の間に習得し、（自身得意としていた槍投げにはエントリーせず）円盤抛に出場し、2位の成績をあげている。

この大会の団体5位、個人総合優勝は、俄然日本国内の女子競技を活潑にした様子が『スパイクの跡』にある。帰国後大毎などが主催する国内女子オリンピック大会で、ティーンネイジャーの活躍の様子が語られている。さらには、人見自身、国内大会で和歌山日方小卒の橋本に50mできわどい判定の結果、敗北するというような結果を招いている。それは明らかにスタートの失敗で、短距離におけるスタートとフィニッシュについては『最新女子陸上競技法』にも詳説しているのであるが、改めてスタート練習に取り組む人見があつた。それが後（1928年）に百米の世界記録につながるのではある。

とにかく、エテボリ大会は日本陸上競技史において画期となつたわけである。

しかし、人見絹枝は、この大会で七万の観衆の賞賛を浴び、国際女子競技連盟ミリア会長の賛辞をうけながら、終わつた瞬間に不満を述べている。それはこの大会の競技日程に対して、さらには、自分が歴史的な存在として考えていたオリンピックが男子だけのものであつたことに対してである。そのオリンピックにおいて活躍したいと思つたようである。

また、この大会に参加して初めてマッサージをうけたことを述べる。試合前の熱い湯へ入ることの功罪についての注意をうけるのもこの時である。そして、マッサージ師の合理的な知識やプライドにも感銘をうけている。

## （2）1928年第9回オリンピック・アムステルダム大会

エテボリ大会で、多くの競技者を目の当たりにし、またその成果が自分にはもちろん、多くの後継者の奮起を促すことになるのを実感すれば、初めて女性参加種目ができたアムステルダム大会への参加は、人見絹枝にとって、形容しがたいものであつたろう。人見絹枝の意気込みは、このとき個人競技として認められた4種目（100m,800m、円盤投げ、走高跳）全てにエントリーしていることで知られる。事実、人見絹枝という女性はアムステルダム大会800米銀メダルということで語られる。そしてそれだけでも、後の日本の女性

競技者の精神的よりどころになっている。

アムステルダム大会は、人見絹枝にとっても、日本女子陸上競技にとっても現実に歴史的に語られる大会である。しかし、人見絹枝と競った国々の選手は、生涯にわたって、あるいは社会全体がスポーツを楽しむというそのような社会の人々なのである。人見の場合は自分が高い身体能力をみせ、その表現の感動をあたえることによって、自分のライバル等が享受している社会を、自分がつくっていく、そのような役割を自分が課せられていると自覚していたようである。それは国内大会での文部省との意見対立にもある。そのような状況や様々な思いのギャップがいよいよ強くなってきたのであろうか。

それは、大会前のロンドンの公園でスポーツを楽しむ人々のルポにも現れ、また 800 米決勝で死闘を演じたドイツのラトケが二児の母親であることを、アムステルダム大会後のヨーロッパ転戦中に聞いたとき、彼此の社会的熟度の違いに愕然しなかったか、あるいは、改めて自分の社会的使命を感じたのであろうか。

### (3) 1930 年第 3 回万国女子オリンピック・プラハ大会

1930 年、プラハで第 3 回万国女子オリンピックが開催された。人見絹枝は 4 年前にミリア女史に団体で参加することを期待されていた。

人見も出来るだけ、日本の後輩選手に、ヨーロッパの地でヨーロッパやアメリカの選手のトレーニングやフォームを直接に見せたかった。『ゴールに入る』に寄せられた、その時の選手がよせた序文によれば、選手としての人見絹枝は抜群でみんなそのフォームに見入ったことようである。しかし人見はそのような若い人たちに世界の人との競い合うことによる交流を願っていたようである。

そのための企画、選手団の選抜編成、さらに育成、合宿、もっと困難な資金に苦慮している。それで全国の高等女学校の生徒からの低額の寄付金を募る方法をとったのは、人見の発案、実行であった。

協会の役員でもあった谷コーチは、そのような仕事のために競技者としての人見が犠牲になるのを激しく憂えている。

人見絹枝は、アジアから第三回大会にはアジアから大挙するというミリヤ夫人との約束を果たした。多くのヨーロッパやアメリカの女性選手と、女性も競技やスポーツを通じて自己を実現することができる、そのような社会的ひろがりを示すことができた大会だった。

人見絹枝は個人総合では 2 位、しかし団体総合は 4 位で、総得点は、13 点だった。リレーの 1 点があったのである。

世界女子オリンピック（国際女子競技大会）と言いながら、実際には欧米の選手だけであった。そこへ、欧米以外から、極東の日本の選手団、実際には人見絹枝グループが参加したのである。欧米の女子大会の枠を超えた世界スポーツ史的な大会であった。それはひとえに人見絹枝の功績でもあった。実際に、ヨーロッパでの転戦の際に「HITOMI」という声援がよく聞かれたという。1931 年には、プラハの町には人見絹枝の記念碑がつけられた。それは、スポーツにおける人見絹枝の世界史的な功績を讃えるものである。

## 四 人見絹枝という存在

世界的なアスリートであったということで、思い出される人である。けれども、「走る

人、跳ぶ人、投げる人、書く人<sup>\*1</sup>』といわれる。著書を出版したのは、プラハへの選手団の費用の一助ということもあったらしい。人見絹枝を尊敬する有森裕子が、競技者のプロ化を提起し話題になっていたが、人見絹枝も競技におけるプロフェッショナルな存在を課題にしている。それは、競技技術や運動生理についての深い体系的な知識を備え、指導できる存在のことである。さらには体育行政についても人見は思うところが多かったようである。競技する者としては、高い技術を習得しレコードを出す、つまり人間の能力を実現することも必要であるが生涯に涉ってそれを楽しむことも大切である。老若男女が様々に楽しむヨーロッパの風景を何度も紹介しており、勤務後トレーニングに励む自分の記録も公表している。つまり、人見は自分の職業は記者であると言っている。プロフェッショナルとは言っても、自分自身を切り売りするようなプロ化<sup>\*2</sup>などは思いもしなかったであろう。

また、選手としての名声を利用して何かをするのではなく、競技の錬磨を通じて交流する、地域や国を超えて、尊敬しあえるそのような関係を現につくっていた。だから、フランス人のミリヤ夫人に対しても、血縁者に対するような感情で接しており、プラハ派遣の日本の選手達は人見を姉のように慕っている。反面、具体的には書いていないが、あるポーランド選手に対しては厳しい表現がある。

19歳のときモスクワで行った、ソ連政府のスポーツ担当者に対するインタビューも、りっぱな運動部記者として行っており、興味深い記事である（もっとも、後年、毎日新聞が企てたのか、張学良との会見は面白くはない）。プロの記者としての職責を果たしている。まさに世界的規模で自分個人の存在を際立たせることができる、胡適がいう真の東洋の新婦人だったようである。

『ゴールに入る』は、「あゝ凡て終つたのだ。さようなら！」で終わる。2月に発行されていて、その3月に咯血し、8月に逝去する。この巻末の言葉は、予見めいたものと受けとられかねない。あるいは、本当に疲れていたのかも知れない。帰路の船内で、遠征に対する国内の反響を聞いていたからである。

しかし、人見絹枝は、1928年のアムステルダム・オリンピックのあとのヨーロッパ転戦中に、ミリヤ夫人に、国際女子競技会（女子オリンピック）の第3大会はプラハで開催するが、その次、1932年の国際女子競技会（女子オリンピック）第4回大会は、日本で開催することをミリア夫人提案している（『スパイクの跡』p.384-5）。ラトケとの死闘もなんのそのである。人見絹枝も元気なころで、当然多くの人が、人見の構想に触れていることになる。極東など想像もつかないミリア夫人は、日本は遠いから、と少し退いている。人見絹枝は、ミリア夫人を招待することを申し出ている。「お金は私がなんとかします」と言っている。

イベント屋や企画屋の言とは重ならないとは思う。スポーツをして、自分を表現することは、他者とつながるきっかけになるのである。五人の妹のような少女たちを、プラハやその他の都市に連れて、多くの選手たちを間近に見せ、競わせた。それをもっと大規模でやりたいと思ったことは判る。

人見絹枝は、1926年、イエテボリで、始めて円盤を手にして、集中練習の結果、そのときの大会で2位に入賞している。なんという人かと思うが、実は、イエテボリへ出発する8月よりも前の4月に、既述の『最新女子陸上競技法』を出版しているが、その191-2頁に、競技や基礎トレーニングの紹介をしている。確かに正式の規格の円盤の入手は、執

筆時に間に合わなかったとある。このとき、というより、これ以前から持ち続けたモチベーションが、大会直前の集中力として結果したようである。

人見絹枝は、何も記さないが、ロサンゼルス大会の三段跳びで驚異的な世界記録で優勝した南部忠平が、アムステルダム大会前に、人見絹枝の、それとないアドバイスで、スランプを脱したことを語っている。

南部は、(三段跳びで優勝した)ロサンゼルス大会でも走り幅跳びの優勝の大本命と目されていた選手であった。そのころ、つまり昭和2(1927)年の9月ごろから南部は、フォームを改造するために、ひざを伸ばして、足を突き出すように歩いていたらしい。それを見ていた人見が、その年の暮れに南部に声をかけたそうである。

……人見絹枝さんが、

「南部さん、練習をしているんだが、ひとつ走り幅跳の試合をしましょう」という。

「人見さんになんで負けなければならないんだ。片走<sup>足カ</sup>だって勝ってみせる」と、跳んでみせたところ、もうひざが全然いけません。少しも力が入らない。いわゆるひざが笑って跳べないのだった。結局人見さんが5メートル95-6跳んだと思う。私は5メートル94-5で全然飛べないのいびっくりしてしまった。それからその歩き方をやめた。それで翌年の5月だったと思うが、大阪のオリンピック予選で前記のとおり7メートル35を跳んで資格を得たというわけである。

(『南部忠平自伝』「人間の記録117」、株式会社 日本図書センター 1999,p.36-7)

たまたま、南部忠平に、走り幅跳の試合をしないかと声をかけるまで、必死になって珍妙なトレーニングをする南部を、人見は、どのような顔をして見ていたのだろうか。思わず微笑んでしまったか、心配そうな顔をしていたのか、南部は、人見のアドバイスのおかげで、オリンピックの出場の資格も得、その後、7m98という、驚異的な世界記録を樹立することになる(尤も、南部は、わずか2cmで人類で最初に8mを跳んだものになり損ねたと悔しがっている)。日本人で、この記録をやぶるには、40年かかることになる。

しかし、なんとも心なごむ風景である。

大きな大会の度に生き生きとし、多くの競技記録とルポルタージュの記録を残し、自分を軸とする世界的な交流を作り出す、そういう新しい国境を越えたヒューマンコミュニティの作成途中の殉教のような亡くなり方のような気がする。大正デモクラシーの時代に育ち、その成果を世界にアピールし、世界的なスポーツ・レイディが、激しい人生を終えた1931年の満州事変は、人見絹枝がつくりあげようとした世界の終わりを告げているようでもある。なにか人見絹枝という人がそういう歴史的な人であったということ象徴しているようである。

\*1 多くの和歌を残していることをいう。

\*2 有森が人見絹枝が直面した問題を受けとめようとすれば、自身オリンピック代表選考において受けた苦痛の原因の除去ではないか。

競技がより魅力的な、人々の人生や生活に寄与できるものとして発展し、そして、スポーツが、国民の生活の実質的な豊かさに直結するようなものになる、そのような活動を支える合理的な競技団体の整備・運営を担えるような真のプロフェッショナルが求められのである。

球技などのビジネスとしてなりたっているスポーツは別にして、走り、跳び、泳ぐといったゲーム性の少ないスポーツのプロ化というのは、しばしば競技選手として得た知名度を、換金することになっている。実際には競技で得た知名度をもつ、アマチュアの演技しかできないタレントになってしまっている。

プロ化というのは、スポーツが本来もって歓喜や興奮といったものとは別に、スポーツをビジネスあるいはコマーシャルとし、プレイヤーは、その生鮮商品として扱われているだけである。扱っている方は毎年、商品が出現してくるからよいが、生身を商品として扱われた人の人生のケアについても、学校や文科省などは、考慮すべきではないかと思う。